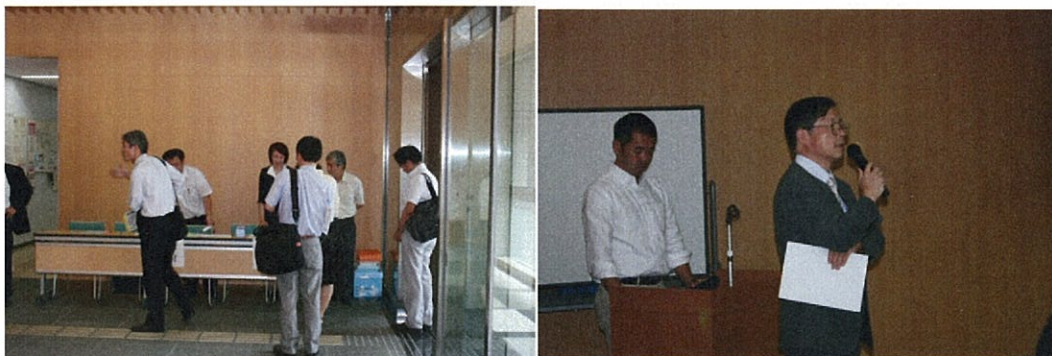


平成24年度千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議 バイオバンク研究部会シンポジウム開催結果報告

平成24年9月14日（金曜日）、千葉大学 亥鼻キャンパス 薬学部120周年記念講堂にて、「平成24年度千葉県バイオ・ライフサイエンス・ネットワーク会議バイオバンク研究部会シンポジウム」を、横浜・神奈川バイオビジネス・ネットワークの後援を得て開催しました。参加者は60名で、病院関係、製薬・医療関係企業、診断薬メーカー、報道関係、地方自治体等、各方面からの研究者を中心に、事業開発、研究企画や一般行政、幅広い職種から参加者を得て盛況のうちに終了しました。



（当日の受付風景）

（総合司会の千葉大学 野村文夫先生）

1 概要

革新的医薬品創出と臨床医学研究の推進を視野に入れた、いわゆる「バイオバンク」（ヒト生体試料の保存と利用）の取り組みが近年国内外で立ち上がっています。それらの動きを受けて、千葉県内の各機関が連携してどのように取り組んでいくかを考えるため、国内の第一線でご活躍されているバイオバンク関係者7名の先生方にご講演をいただき、その後意見交換を行いました。

2. 開催結果

本シンポジウムの関係者を代表して千葉大学医学部附属病院長 宮崎勝先生より、開会のあいさつをいただいた後、千葉大学大学院医学研究院 分子病態解析学教授 野村文夫先生の総合司会で、シンポジウムを開催しました。



（開会のあいさつ 千葉大学病院長 宮崎先生）

（千葉県 商工労働部 田村課長）

千葉県 商工労働部産業振興課 課長 田村真一氏から、「千葉県におけるバイオバンクの取組について」という演題で、千葉大学、千葉県がんセンター等と連携してバイオバンク研究部会を設置した経緯やねらい、研究部会のこれまでの活動状況等について報告いただきました。

続いて、独立行政法人国立がんセンター 中央病院臨床検査部 医長 古田 耕先生より、「ヒト生体試料研究会について」という演題で、医薬基盤研究所の増井先生、千葉県立がんセンターの中川原先生らと設立した、ヒト生体試料研究会の活動報告のほか、海外の検体保存研究、バイオバンク運営に関する動向等について報告いただきました。

続いて、筑波大学 つくばヒト組織診断センター 助教 竹内朋代先生より、「つくばヒト組織バイオバンクの運営と地域連携」という演題で、筑波大学のバイオバンクについて、設立の経緯、管理体制、施設設備、検体の受け取りから保存までの流れ、臨床情報管理、品質管理等の説明、茨城県でのバイオバンクネットワーク化構想等について報告いただきました。



(国立がんセンター 古田 耕先生)

(筑波大学 竹内朋代先生)

続いて、千葉大学大学院医学研究院 分子病態解析学教授 野村文夫先生より「ISBER2012の報告」の演題で、バイオバンクの国際組織である ISBER が、本年5月にカナダバンクーバーで開催した年次総会での、検体保存等に関するポスター発表等についての紹介、国際的なガイドラインに準拠した保存方法の確立、地域の関係機関との連携の重要性等について報告いただきました。



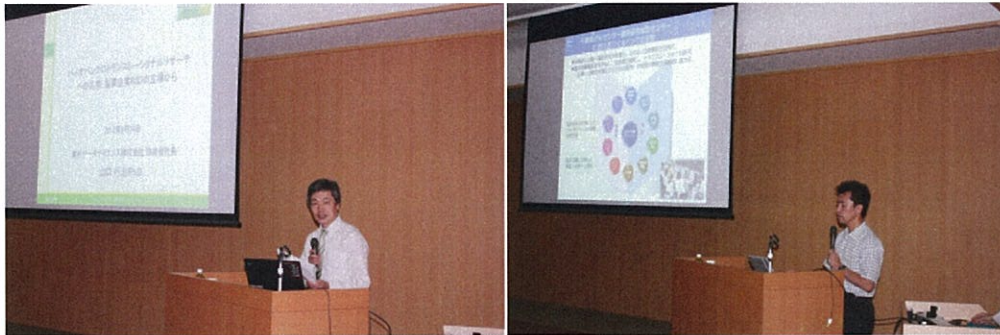
(千葉大学 野村文夫先生)

(神奈川県立がんセンター 高野康雄先生)

休憩を挟んで、神奈川県立がんセンター 臨床研究所 所長 高野 康雄先生より、「腫瘍組織センターの取り組みについて」の演題で、神奈川県立がん臨床研究・情報機構の腫瘍組織センターにおけるバイオバンク事業に関して、組織体制、包括同意書の取得、検体の保存・活用、共同研究の手続き等について、腫瘍組織センターを紹介するDVD の上映と合わせて、報告いただきました。

次に、実行データサイエンス株式会社 取締役社長 山口行治先生より、「バイオバンクのトランスレーショナルリサーチへの応用 ～製薬企業の R&D の立場から～」という演題で、製薬企業の視点から、新薬開発コスト低減のためのバイオバンク活用の可能性、米国FDAの審査の現状、海外のオープンソースバイオバンク管理システム等について報告いただきました。

最後に、千葉県がんセンター 研究局 発がん研究グループ 部長 上條先生より、「千葉県がんセンター バイオバンクの現状と改善点」という演題で、同センターにおけるバイオバンクの設立経緯、役割、試料利用に関する同意書取得から保管までの流れ、試料の研究活用状況、今後のバイオバンクシステム機能改善作業等について報告いただきました。



(実行データサイエンス (株) 山口行治先生) (千葉県がんセンター 上條先生)

予定の講演が終わった後に、野村先生の司会で総合討論を行いました。

(独法) 医薬基盤研究所の難病・疾患資源研究部の増井徹教授や横浜市立大学医学部 分子病理学教室の青木一郎教授から各所の組みについての追加でコメントをいただくなど、活発な意見交換がなされました。



(医薬基盤研究所 増井先生)

(会場の風景)

最後に、主催者側を代表して、公益財団法人かずさDNA研究所副所長の小原収からの挨拶で、シンポジウムを盛会に終わりました。



(かずさDNA研究所 小原収)

3 おわりに

参加者様の感想として、アンケート結果から

- ・ バイオバンクの取り組みの現状について理解が深まった。
- ・ 欧州のように、日本国内でもバイオバンクのネットワークが活性化することで、「ヒト」の材料を用いた研究が活性化するとよいと思い参加しました。
- ・ 千葉県には、千葉県循環器病センター、千葉県こども病院など、県民のニーズに応じた医療機関がある。このような医療機関も参加して、県民の疾患に対して、充実した県民の疾病に対応したバイオバンクを作る動きが出現することを強く希望します。
- ・ 千葉県としての継続性に期待しています。

等の反響をいただきました。ありがとうございました。

千葉県としても、昨年5月にバイオバンク研究部会を設置して、千葉県におけるバイオバンクの取組を開始したところです。

今後、参画機関と連携して、貴重なバイオリソースを適切に収集・保存し、研究利用を通じて、千葉発の革新的医薬品開発などの医薬健康産業の発展拡大に資するよう取り組んで参ります。

今後とも、会員の皆様のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

以上